

ケソン交流40周年記念事業

～第16回ケソン派遣を終えて～

ボーイスカウトフィリピン連盟ケソン市協議会と千葉地区協議会の交流は、1979年から始まり、2019年で40周年の節目を迎えることになった。そこでケソン交流40周年を記念して第16回ケソン派遣を実施することになり、指導者5人・スカウト12人の総勢17人が12月27日から七日間の予定で、キャンプやホームステイをしながら交流を深め、翌年1月2日に全員無事に帰国することができた。

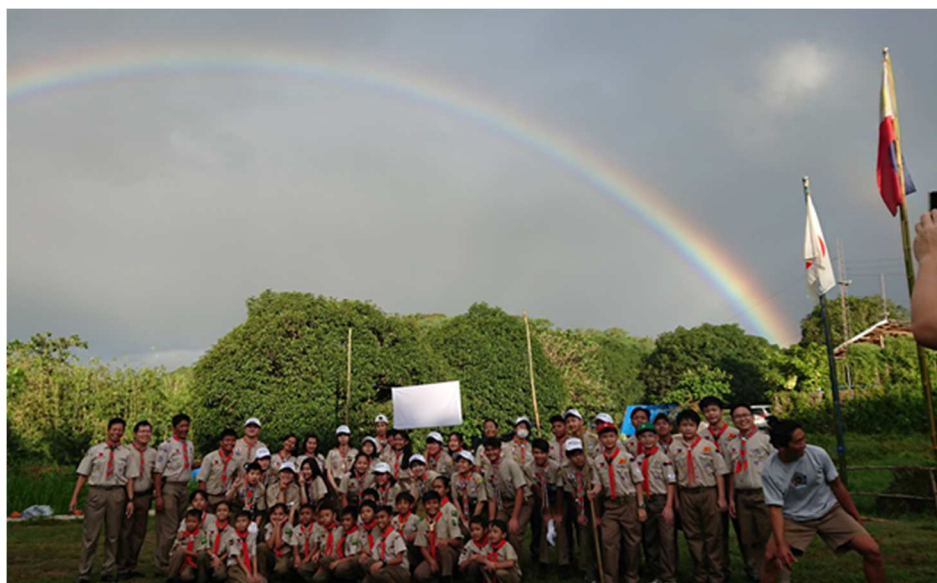
千葉第21団味村章（派遣隊副長）

今回の派遣隊のモットーは「楽しくなければスカウティングじゃない」で、何でもやりたいことをやろうというのが活動方針だった。参加したスカウト達は、このことをきちんと理解し考えながら行動してくれたため、交換プログラムは成功だったといえる。

千葉第27団村上真優（ローバースカウト）

ケソン派遣を通じて、自分の目でフィリピンの文化や歴史、行事・習慣、人柄を観察・体験し、自分にとって本当に多くの収穫があった。この収穫を今後のスカウト活動はもちろんのこと、例えば国際問題を考える際など、様々な場面で活かしていきたい。

Quest Adventer Camp(キャンプ場にて)





日本文化紹介(習字)



イカダラフティングに挑戦



さよならパーティー (エイサーを披露)



ケソン市庁舎にて



次ページより参加感想文全文です。

さあ、準備をはじめよう

ケソン派遣隊副長 千葉第18団 岩井田 慧美

派遣隊スカウトのみなさん、派遣に行く前と、派遣を終えた今、「変わったな」ということはありますか？

今回初めて指導者の立場で海外派遣に参加し、自分も多くの経験、発見、感動をすることができました。

これは、雨宮隊長はじめ、味村副長、渡部副長と共に指導者を務められたこと。

ケソンの指導者の皆さんをはじめ、多くの関係者の方々に支えていただいたこと。

そして何より、12名の派遣隊スカウトのみなさんが一回りも二回りも大きく成長していく様子を体感できたからこそです。本当にありがとうございました。

派遣に行くまで、事前訓練のなかで「なにがしたいのか」「どんなことをすれば現地のスカウトに喜んでもらえるのか」を自ら考え、「どうしたら実行できるのか」を計画してきました。うまくいかないことや、思い通りに進まないこともたくさんあったと思います。

時間をかけて準備をしたエイサー、空手家の子、まつり寿司、書道、餃子…実際に現地で披露してみてどのようなことを感じましたか？

どのパフォーマンスも非常に喜んでもらっていたと私は感じています。

空手家の子は現地スカウトも真似をしていましたね。それだけ印象に残るパフォーマンスになっていたと思いますし、さよならナイトでエイサーを披露した後は、会場にいた全員がじーんと感動しているような印象を受けました。

みんなが力を合わせ、自分の役割をしっかりと果たすことができなければ、現地のスカウトや指導者の皆さんに、あのような素晴らしいパフォーマンスをお届けすることはできなかったと思います。

それぞれ準備は本当に大変だったと思います。

しかし、その準備の過程、現地でのパフォーマンス、みんなの反応、やりきった達成感。

ここから得られたモノは、皆さんの中で必ず活きた経験として、素晴らしい思い出として、これからぶつかるかもしれない様々な困難に立ち向かう勇気の一つとなると確信しています。

今回のケソン滞在では、スカウト、指導者、ホストファミリーをはじめ、本当に多くの方々から温かい歓迎を受けましたね。

上に書いた通り、皆さんもケソンに行くまでの間、たくさんの準備を重ねてきました。

ケソンの皆さんも、皆さんを受け入れるまでの間、きっと私たち以上に、たくさんの準備をしてくださっていたと思います。

交流派遣の素晴らしいところは、行って終わりじゃない、というところにあると感じていま

す。

さて、今度はみなさんがケソン派遣隊を歓迎する番です。

ケソンスカウトが来日した時、どんなことをしてあげたいですか？どんな経験をしてもらいたいですか？

これから半年もたたずに彼らは千葉にやってきます。

固きぞ準備、精一杯の受け入れができるようまたみんなで力を合わせましょう。

Let's enjoy scouting!

Youは何しにフィリピンへ？

ケソン派遣隊副長 千葉第21団 味村 章

なぜか派遣に行くことに

そもそも何で自分が海外派遣に行くことになったのか。今年は長男が世界ジャンボリーに参加したせいで金も無いのに…

それは3月23日。ラウンドテーブルっていうのに参加してた時に出た会話、というか、取り引き。グリーンバー交流会の副実行委員長とのバーターに近い。というか、そんな軽口を叩いてた翌日に参加が決まったというのが本当のところ。

世の中に大事なものはノリと勢いなのである。

自分だって海外派遣に行きたい

実は予感があった訳で。2017年のヒューストン派遣の際、来日する派遣隊のキャンプでQMを担当した。それが終わった時に国際委員の方から、次の海外派遣(交換プログラム)の指導者はどうか、なんて雑談があったような気がするし、それを聞き流してたような気もする。

ただ、そこですでに種は撒かれてた訳で、長男の世界ジャンボリーという要素も加わって、芽が出てしまった訳だ。まあ長男だけ行かせて自分が行けないっていうのはなんか不公平だし。

種を撒いておく、っていうのはスカウト活動もおんなじなんだなあ、なんてことを今になって考えている。

フィリピン

そんなこんなで、12月27日。成田から飛びだってから約4時間。空港ゲートを出るとそこは南国だった。いや、実は飛行機を降りた時点ですでにその熱気を感じたので、正しくは「飛行機を降りたらそこは南国だった」である。ほぼ10年ぶりの海外、しかも団体、何もかも勝手が違う。ロストバゲージもなく、荷物をピックアップし、空港から出る。日差し、熱気、植生、全てが違うところに来たことが明らかになる。そして、出るなり、ケソンからお迎えに来てくれた方々に首から貝でできたネックレスをかけていただき、バスまで案内し

てもらおう。さあ、Quest Adventure Campに向けて出発。

生命力感じる町

活気と熱気。人々が生きてるのが分かる街。バスから見えた景色と聞こえてくる音はその言葉に集約されていた。

日本で見かける都会のたくさんの人、というのとはにかく歩いているイメージなのだが、ここフィリピンでは立ち止まっているイメージ。そこで何かをしている訳でもないけど、人が固まってる感じだった。クリスマスシーズンも終わり、次は新年を迎える、というタイミングも関係したのかもしれないが、街はとても賑やかだった。

その後のホームステイではカウンターパートのラウルさんと共に公共交通機関で移動を繰り返すこととなる。公共交通機関大好きな自分にはたまらないシチュエーションである。バイクの横に屋根付きのサイドカーのついたトライシクル、乗合バスのジープ(と呼んだ)、タクシーである。特に乗合バスは、違う国に来た、ということを実感する乗り物で、かつほとんど旅行者を見ないというのも良かった。

リーダーたちの思い

今回の派遣隊。体調のモットーは「楽しくなければスカウティングじゃない」とのこと。これは訓練の場を含め、何度もスカウトたちに伝えられ、なのでやりたいことはやろう、という活動の指針となった。では、楽しいだけでいいのか？という疑問も出てきてしまうのですが、そこは海外派遣に立候補してきたスカウトのこと、交歓プログラム、プレゼンテーション、文化交流などなど、ちゃんと考えてくれました。

主役の彼らが考えて行動しているなら、余計な手も口も出さない。それでうまくいったのだから、今回の交換プログラム前半は成功だったと言えるでしょう。

コンセントレーション

今回、カウンターパートのラウルさんが何度か言っていた言葉で、スカウトたちにゲームをやらせる時の目的として、集中させる、しゅうちゅうりよくを鍛える、そんな感じのニュアンスを感じました。ただ楽しいだけのゲームよりも、その方がスカウトたちが成長した時に役立つのかも、と思ったので、今後取り入れていきたい。どうやってやるかはこれから勉強です。

スカウトたちが知ったこと

この1週間でスカウトたちは何を知ることができたのか。確かに結隊式は8月31日であり、それから何度も準備のために集まってきたけど、おそらくその期間の経験よりも濃密な何かをこの1週間で感じてくれたと思う。

それは最終日のパーティーが終わった後の別れ際の表情や声、そして彼らの動きから感じ取ることができたから。さあ、みんな1週間で親友になれたかな？

この先のこと

4月末、今度は自分たちがホストとなってゲストを迎え入れる。どんなプログラムを提供するか、今から楽しみでたまらない(一応プログラム担当)。ラウルさんもプログラム担当だったことから、フィリピン滞在中もほぼ一緒に行動し、その時その時のプログラムの準備

の手伝いや運営をすることになっていた。日本っていうのはどんどこなんだ？って疑問に答えられるようなプログラムにしたい。

そして4年後へ

2年後にはヒューストン派遣が、3年後には第25回世界スカウトジャンボリーが、そして4年後にはまたケソン派遣がやってくる。

もちろん、ボーイスカウトだけが全てではない。それぞれが自分の旅を見つけて、そして再び旅に出ることになると思う。その時、またケソンに行った、親友に会いに行った。そんなスカウトたちが出てくるような思い出の旅にできていたなら、それは指導者として最高の気分になれる話である。

第16回ケソン交流（派遣）事業に参加して

ケソン派遣隊副長 千葉第13団 渡部 慎司

今回、私がケソン派遣に参加することになった理由としては、千葉第13団では以前から国際派遣事業に対し、スカウト、リーダーともに積極的に参加しているのを見ていたからです。私も機会あれば是非参加したいと考えていました。また、リーダーとして参加するにあたり、リーダーの参加が多ければスカウトの参加が少しでも多くなるかな？ということも思っていました。その甲斐があったかどうかは分かりませんが、スカウト12名、リーダー5名の派遣隊を編成し派遣することになりました。

私は英語を学校で8年間習いました。嫌いではないのですが苦手な科目の1つでした。社会人になり、普段の生活や仕事で英語を話す機会が無いので、会話が成立するかどうか非常に不安でした。そこで、派遣前に簡単な英会話の本を買ってみました

ものの、そんな付け焼刃ではほとんど頭に残ることはありませんでした。やむなく最終手段のポケトークという文明の利器に頼ることとし、意気揚々とレンタルして持って行きました。しかし、なんと初日からのキャンプ場では、4Gの電波がほとんど入らず、（ポケットWi-Fi 役立たず）＝（ポケトーク 役立たず）という式が出来上がり、この後どうなることかと非常に心配でした。しかし、カウンターパートナーの LUWALHATI M. MEDINA さんや他のリーダーは、私が英語を話すのが苦手だとわかると、ゆっくりと丁寧に話してくれたので、なんとなく話している単語や雰囲気を感じとる事ができ、ぼやーとですが理解できるようになっていったと思います。キャンプ場でポケトークに頼ることなく会話したことによって、無くてもどうにかなると思い、市内に戻り良好なWi-Fi環境でもポケトークを使用することはありませんでした。そして、日本へ帰る頃にはだいぶ耳が英語に慣れてきたのを実感することができました。「習うより慣れよ」とはこのことなのだという事をあらためて体験できました。ただ、耳は慣れても、こちらの思いを伝えれるボキャブラリーの

貧弱さはどうしようもない、という事も実感できました。ただ、こういう状況の時にはこのようなフレーズを話せばいいという事も次第にわかるようになったと思います。

キャンプ地では、今回の派遣に参加していないスカウトとの交流もあり、みんな楽しく活動することができていました。様々なゲームやキャンプファイヤを行い、短い間でしたが良い時間を過ごせたと思います。

ホームステイでは、私のカウンターパートナーの家庭でじんましんのような症状が出た家族がいるという事で、ホームステイ初日の家はなんとケソン市協議会の事務所に泊まることになりました。事務所の机の隣にキャンプ用のベッドを用意してくれて、そこで寝ることになりました。その部屋の主のトニーさんは、床にヨガマットを敷いてそこで寝てました。私のホームステイ生活は一体どうなることかと不安を抱きながら寝ました。次の日も同じかと思っていたら、次の日からはウィリアムさんの家にホームステイすることになり、やっと普通のホームステイができると安堵しました。

フィリピンでの車の移動中は、日本では体験できない様々な事や物を見る事ができました。まず、交通マナーの違いには驚かされました。クラクションを絶え間なく鳴り響かせながら走るバス、横断歩道ではない所を平然と横断していく歩行者、3ケツ・ノーヘルのバイク、と例を挙げるといくらでも出てきます。また、路面の凸凹が多いのと、それなりの交通量があるにもかかわらず、交差点には信号が無いというインフラの遅れ？も垣間見ることができました。仕事柄、交通インフラ整備事業に携わっているので、とても興味深く見ていました。さらに、日本のODAで建設されている鉄道の高架橋の工事は、私が仕事で行っている工法を使用しているので気になり、特に注視して見ていました。日本とは耐震設計等が違うので、橋脚の太さも細く、上部工もスレンダーな印象を受けました。また安全対策においては、日本はやりすぎではないかと思えるほど、安全対策が施されていないという事も見る事ができました。

まだまだ沢山の書ききれないほどの思い出があるのですが、この辺で割愛させていただきたいと思います。知りたい方は私に聞くよりも、自身で体験することをお勧めします。

今回の派遣を通して、ケソンの方の歓迎ぶりやおもてなしにはとても嬉しく思い、ありがたいことだと痛感しました。感謝しています。ゴールデンウィークに千葉でケソンの方を受け入れるにあたり、この想いをお返ししたいと思っています。私がまたケソンに行きたいと思ったように、また千葉に行きたいと思って頂けるように、とびっきりのおもてなしをしたいと思います。

第16回ケソン派遣を終えて

千葉第27団ローバー隊 村上真優

この派遣に参加するにあたって自分の中で掲げていた目標があった。ケソン派遣を通して、自分の目でフィリピンの文化や歴史、行事・慣習、人柄を観察・体験し、あくまでも自分にとっての収穫をより多く得ることであった。振り返ってみると、本当に多くの収穫があり、この目標は概ね達成されたと言える。では、具体的にどんなことが得られたのか、ここに記していく。

1つ目はフィリピンスカウトとのキャンプから感じたフィリピン人の人柄である。正直な話、私は初日からあんな盛大に歓迎されるとは思っていなかった。特に私のカウンターパートナーは、私の名前を事前に覚えてくれていたり、荷物を運んでくれたり、私のことを他のフィリピンスカウトに紹介してくれたり、親しみをもって接してくれた。また、拙さはあるものの日本語で話してくれたり、日本語の習得に意欲的であったり、自分達の国に寄り添うような姿勢も見られた。お互いの国の文化や伝統を尊重し合えることは、交流において大変重要なことであると私は考える。それができるフィリピンのスカウトに出会えたのは1つの収穫である。

2つ目はビラ・エスクドロの中にある元教会の博物館から得られたフィリピンの歴史的背景や考え方、文化の違いである。フィリピンが元々植民地であったことや、その植民地時代を生き抜き、遂には独立まで辿り着いたというフィリピンの歴史を資料や展示品により理解を深めることができた。勿論それらも良かったが、13~15歳のスカウトが自国であるフィリピンの歴史について理解している上で、私達に説明してくれたことが私の中で1番印象深かった。その歳で自分に同じことが出来ただろうかと考えさせられた。フィリピンは独立に至るまで数々の苦しい思いや行動を受けていたこと、またそれを乗り越えて勝ち取った独立であることを私達は忘れてはいけない。

今回の派遣で得た収穫を今後のスカウト活動だけでなく、例えば国際問題を考える際など、様々な場面で活かすことがこれからの目標である。その為にまずはフィリピンスカウトの受け入れに向けて準備していこうと思う。

第16回ケソン派遣報告

千葉第1団ローバー隊 大後里咲

今回の第16回ケソン派遣は、私にとって2回目の海外派遣であったが、前回に比べ多くを学ぶことができた。前回は語学力が足りず、相手の言葉に対して自分の言葉で返事をする事が出来ずとても歯痒い思いをした。それからというもの、私は英語に対して1つの学問としてではなく、1つのコミュニケーションの手段であるという認識を持つようになった。

今回の派遣では、前回より成長した言語力を生かし、多くのスカウトと交流することができ、実りの多い派遣となったと感じている。その中でも、実際に現地の人と関わらなければ分からないことと、ボーイスカウトの派遣だからこそわかったことについて書いていこうと思う。

今まで日本国以外のアジア圏の国の経験がなかったが、同じアジアでもこんなにも雰囲気や文化が違うことに驚いた。まずはその交通量と交通手段の多さだ。首都マニラからケソンに向かう道は大変混み合っており、バスや車の間をバイクが通り過ぎるという光景が続いていた。また、ジプニーやトライセクルのような日本では見られない乗り物も、フィリピンの人々の足になっていることがわかった。それらには窓やドアがなく一見危なそうに思えた。しかし、実際にそれらに乗ってみると風が気持ちよく、手軽に乗り込める雰囲気が良いなと感じた。2つ目に、食文化の違いに驚いた。日本では高級なマンゴーが食卓にぼんぼんと出てきて、「これはいくらするの?」と聞いたところ、「あまり買うことがないのでわからない」という答えが返ってきた。なるほど、マンゴーは日本人にとっての柿みたいなイメージのかなと思った。また、アヒルの卵を勧められ、殻をむいてみたところ、そこにアヒルの子が横たわっていた。私はどうしてもそのアヒルの子を食べることに抵抗を感じていたが、目を瞑って食べると味は普通に美味しくて、とても驚いた。しかし、これを普段食べているフィリピンの人々はすごいなと思った。

次に、ボーイスカウト活動の中での違いとして、そのボーイスカウトの知名度の高さに驚いた。学校で隊を持っていることもあり、フィリピンのボーイスカウト人口はとても多く、その存在は広く知られている。制服を着てショッピングモールに行った際、警備の人の敬礼に対してフィリピンのスカウト達が元気よく敬礼する姿を見て、ボーイスカウトが広く親しまれているのは素晴らしいことだと感じた。日本では、あまりこのような光景を目にすることはなく、ボーイスカウトの存在さえも知らない人が数多くいる。そのせいか、ボーイスカウトであることを公言しないスカウトも多いだろう。私は、ボーイスカウトという活動を、もっと世間に広く伝え、より多くの人にその活動の素晴らしさに気づいて欲しい。そのためには、ボーイスカウトとしての誇りと自覚を持って日々を過ごしていきたいと強く思った。

今回のケソン派遣では、ただ旅行するだけではわからないことを、身をもって体験し、多くの知識を得ることができた。この経験をもとに、これからも国際交流を続け、更に自分の視野を広げていきたいと思う。また、ボーイスカウトとしての自覚と誇りを持って、今後もスカウト活動を続けていきたい。今年の4月には、フィリピンのスカウトが日本にやってくるので、それまでにタガログ語で挨拶や簡単な会話を習得するのが目標だ。

海外派遣から変わった私の進路

千葉第18団ベンチャー隊 藤川亜由

「冬にフィリピンに行ってきます」

「…え？(笑)」

ケソンに行くことが決まり、塾の先生や学校の先生、友人に伝えた時決まってこんな反応を受けました。

おそらく、この事実を知った人の頭の中には「受験生」というワードが過ったのでしょう。冬休みは受験生にとって大事な時期。それでも私は決して意見を変えませんでした。受験という理由でそれ以上に価値のあるものに目を背けることは私にとって難しいことでした。

私が心に残っていることは、二日目の日本の文化紹介の一つである書道の紹介をした時です。フィリピンのスカウトの名前を漢字の当て字で書いてプレゼントしました。私は条幅という大きめの紙で「謹賀新年」と書いたり、オーダーメイドで名前を書いたりしました。ガルシアさんを始め、沢山のスカウトが喜んでくれました。

私は、自分の書道が誇れる特技だと思っていません。ですがここまで喜んで貰えると、まだ書道を習っていてよかったぁ…と思いました。同時に、もっと極めようとも思いました。

今回の交流では楽しいことばかりではありませんでした。

これは、私個人の感想です。

話で聞いてはいましたが、フィリピンには貧富の差がありました。

モールからの帰り道、横断歩道を渡ろうと車が通り過ぎるのを待っているとき、二人ほどの少年が右手を私たち側に差し出してきました。周りを見ると、同じくらいの歳の子供たちに囲まれる寸前。

私は一緒にいたフィリピンスカウトの方を見ると、首を横に振っていました。そして、少し早歩きで横断歩道を渡りました。

母からの話で聞いてはいましたが、実際にこの目で見ると正直どう思えばいいのか分からないです。

色々な考えがある中、私はこの事実を事実として知っておくべきことだと思いました。

このようなことがきっかけで、私は自分の視野の狭さを実感し、もっと知っていきたいと思いました。そのため、私は高校を勉学以外のことも沢山学べる学校を志望しています。

海外派遣には簡単に行けるものではありません。金銭面はもちろん、沢山の準備なども必要になってきます。ですが、世界スカウトジャンボリーに引き続き参加を許して下さった両親、お世話になったリーダーの皆さんに感謝します。

ありがとうございました。

フィリピン派遣

千葉第18団ボーイ隊 佐治慈恵

僕がフィリピン派遣に行きたいと思った理由は、外国人の方たちと交流、文化の違いや日本との違いを知りたかった僕は外国に一人で行くのは初めてで、すごく緊張していて、空港で色々な検査があり、このように検査することはすごく重要なんだなと思いました。今回の飛行機はジェットコースターのような感じだった。

フィリピンに着くと温かい空気がきて、フィリピンに行ったと実感がすごくわいた。フィリピンでバスに乗ったとき、すごく道がたがたでクラクションがいっぱい鳴ってすごく驚いた。

フィリピンスカウトに会うと、初めは気まずかったけど、ゲームやダンスなどをやっているうちに仲良くなり、話してみるとすごく明るい人たちだなと思った。

ホームステイでは、首都マニラに近い場所だったけど、他の人とのホームステイの場所の差があって驚いた。

食事の時には寿司といわれたものにマンゴーが入っていたり、タレの中にマンゴーが入っていて、フィリピンはやっぱりマンゴーがとれるからだなと思いながら食べました。

フィリピンのスーパーに行くとき荷物チェックがあったけど、その時ボーイスカウトの制服を着ていたらチェックをしなくても通れた時があって、ボーイスカウトは偉大だなと思った。

僕たちが帰るときにフィリピンスカウトからハグを受けてすごく優しくて明るいひとたちだなと思いました。

フィリピン派遣に行った感想は、僕が外国に行くのも初めてだったし、英語も全然話せなかったけど、フィリピンの人達が積極的に話かけてくれたので仲良くなれて良かったです。そしてボーイスカウトは外国をつなぐことができるんだなと思い、ボーイスカウトは偉大なんだなと再認識しました。

このフィリピン派遣を最後にせず、外国の派遣など外国に関わるものを積極的にやっていきたいです。フィリピンスカウトが日本に来た時は房総のむらなどの日本の文化や鎧や兜をきかせてあげたいです。そして日本にきたらフィリピンスカウトを明るく歓迎したいです。

ケソン派遣を終えて

千葉 14 団ボーイ隊 牧山珠久

私は12月27日から1月2日までの7日間ケソン派遣隊として活動しました。おおまかな活動内容は、最初に2泊3日のキャンプ。次に3泊4日のホームステイ。最後はホテルに一泊して帰るという感じでした。この7日間で私はとてもたくさんのことを体験させてもらい、いい思い出をたくさん作ってきました。

まず、キャンプです。キャンプ場はクエストというところで、日本のボーイスカウトのキャンプ場とは比べ物にならないくらい広がったです。また、景色が最高でした。キャンプでは、日本文化の紹介をしたり、チームに分かれてゲームしたり、みんなでプールに入ったりしました。日本文化の紹介で、私は書道をやりましたが、うまくかけなくて苦戦しました。特にクイーニの字が壊滅的ですので申し訳ないです。ゲームは色々しましたが、中でも一番印象に残っているのが豚を追いかけるゲームです。豚に油をぬりたくってつるつるにして、それを素手で捕まえるゲームでした。私は、それを見たときすごく驚きました。なぜなら日本人なら絶対にやらないようなゲームで、たぶん日本でやったら大問題になるかもなっている感じだったからです。豚の扱いもひどくて、皆は食用の豚だと言っていました。わかっていてもちょっと残酷だなと思ってしまいました。

竹を登るゲームの時も、竹に油をぬっていたので、フィリピン人は油がすきなのかなと思いました。みんなでプールに入ったときは、バレーやコインを落とされたのを拾うゲームみたいなものをしました。すごく楽しかったです。私は一枚コインをとれたので今も大事に持っています。

次はホームステイです。私のペアはリースというかわいい10才の女の子でした。リースの家はとてもお金持ちですごかったです。家が4つあるらしく、そのうちの3つに連れて行ってくれました。まず、普通の家があって、その他に別荘みたいなやつとか40階建てのマンションの36階に1部屋もっているなどとてもリッチでした。普通の家にはボーイさんとメイドさんが1人ずついて、別荘にたしか5人くらいボーイさんとメイドさんがいました。別荘は山にかこまれている場所で私はそこで年を越しました。

フィリピンの年越しはとてもさわがしくて、爆竹や花火を打ち上げるなど、日本では考えられない年越しをすごしました。でも正直私は日本の年越しよりフィリピンのさわがしい年越しの方が好きです。

次の日は、別荘の周りをハイキングしました。リースのお父さんはこの別荘の周りの2ヘクタールの山を持っているらしく、そこは川も流れていました。ただ、斜面がすべりやすく、私はそういうところが苦手なので、ビビリながら歩いていたら、ボーイさんがよくあるお嬢様をエスコートする感じで手をひいてくれて助かったし、すごくカッコいいなと思いました。ホストファミリーの家がお金持ちだったことは正直すごくうれしくて、お嬢様になった気分になれましたが、移動手段が全て車だったので私もみんなとトラックで移動したいなと思っていました。ちなみに、車はトヨタでした。

最後に、ホテルで泊まって空港に行き、帰りました。ホテルはどうせ寝る時間全然ない

からオールしよう！とはりきっていましたが、結局、寝てしまい全く起きない私を起こしてくれた同室のあかねちゃんには、本当に感謝しています。

私はこの7日間のケソン派遣に良い思い出しかありません。そして私がこんなに楽しくフィリピンに行って、帰ってこれたのは色々な人が私たちのために動いてくれて、私達を送り出してくれたからです。とても、感謝しています。でも特に私を受け入れてくれたホストファミリーの人たちにはすごく、すごく感謝しています。そのため今度は私が5月にリースが来たとき、日本でたくさんの良い思い出を作ってもらえるように準備し、リースを迎えるという形でホストファミリーに恩返しできればと思います。